

やすだ のぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こままたとき 親 鳥 聖人



イラスト 中川 学

「罪障功德の体となる」

ものまで中止という連絡がきました。ひよっとしたら、一年間、ほとんど舞台がない、ということ

三月のスイス公演が中止になって以来、舞台がほとんどありません。本当は、八月は再びスイスで、そして九月はパリで公演をする予定だったのですが、それも中止。毎日、舞台の中止連絡が続く、来年一月

「どこまで続く泥濘（ぬかるみ）」と口ずさみたくなるほど、新型コロナウイルスの終息が見えませんが、私事で恐縮ですが、

ともあり得ます。以前にこのコーナーで「優雅な貧乏生活」の話を書きましたが、心ならずもそれを実践する日々です。今はその話をインターネット上で連載を始め、まとまったら本にする予定です。

日本のGDP（国内総生産）の落ち込みも戦後最大というニュースが先日流れてきましたが、しかし、経済学者はこれすらまだ甘く、さらに深刻な事態が待ち構えていると言う人もいます。こわいですね。

転んでもただでは起きません。しかし、そんなことを言っている私はまだいい方で、旅行、外食、イベント関係の仕事をされている方はそんな冗談も言えないほどの落ち込みに、「もうこれ以上やっついていけない」と会社をたたむ方も増えています。

が狂いはじめているのを感じます。友人がバレエ教室をしています。習いに来ていた人は、子どもたちと中高年の女性が多いらしいのですが、その方たちがレッスンを終わっても家に帰ろうとしないそうなのです。

「なぜ、お父さんがいると帰りたくないの」と聞くと、「あんなお父さんだとは思わなかった」といいます。たとえばパソコン越しに部下を叱り飛ばしているお父さんを目撃してしまふ。「お父さんは優しいと思っていたのに、本当はあんなにこわい人だったんだ」と知ってしまう。

特に子どもが家に帰りがたらない。理由を聞くと「お父さんがいるから」と。会社に行かずに家で仕事を「在宅ワーク」の会社が増え、お父さんが家で仕事をしているから帰りがたないというのです。

逆もありです。家では偉い人だと思っていたお父さんが、上司の機嫌をとろうとやたらに頭を下げたり、にやにやしたりしている。そんなお父さんに幻滅したという子もいます。

それだけではありませぬ。家に閉じ籠りきりの生活は、人の欠点が目立つし、出やすいものです。部下や同僚たちとの楽しい飲み会もなくなり、毎日、毎日、家にいる生活の中で、自分でも思っていなかった悪い面が出て、それがまた家族から嫌われる原因にもなったりします。

欠点が多い人ほど 徳も多い

それでも子どもはまだマシなのかも知れませんが、このコロナ禍もいつかは収まるし、学校に行っている間はお父さんに会わなくてもすむ。お母さんの場合は、コロナ禍が収まっても、お父さんが定年を迎えたら、ずっと家に

にいる欠点だらけのお父さんを、毎日、毎日、見なければならぬのです。年を取ると認知機能も衰え、こらえ性もなくなり、ますます、ちょっとしたことで怒ったり、ふつうにいいばいばいのに怒鳴ったりしがちになります。そんなお父さんとずっと一緒にいるお母さんは大変です。

でも、一番つらいのはお父さんです。本当は隠しておきたい姿を見られるお父さん。とてもつらいのです。

カウンセラーに相談に行くと、怒りをコントロールする方法をいくつか教えてくれる。それをやってみる。が、なかなかうまくいかない。すると「あとはお父さんの努力次第です」なんて言われてしまったりします。「ああ、ダメだ。俺はなんて悪人なんだ」と落ち込んでしまいます。

阿弥陀寺のご門徒さんである皆さんのことですから『歎異抄』をご存知でしょう。その中で親鸞

カウンスラーに相談に行くと、怒りをコントロールする方法をいくつか教えてくれる。それをやってみる。が、なかなかうまくいかない。すると「あとはお父さんの努力次第です」なんて言われてしまったりします。「ああ、ダメだ。俺はなんて悪人なんだ」と落ち込んでしまいます。

阿弥陀寺のご門徒さんである皆さんのことですから『歎異抄』をご存知でしょう。その中で親鸞

聖人は「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」と仰られています。善人が極楽往生できるのならば、悪人が往生できるのは当然だ、と。

「え、悪人の方が極楽往生できるの」

いやいや、そういわれても、なぜそうなのかよくわからないから、この言葉だけでは、なかなか救われた気持ちにはならない、そういう方も多いでしょう。

そこで今回は、もうひとつ親鸞聖人のご和讃を紹介しましょう。

あ、そうそう。このコーナーでは「ご和讃」をよく紹介しますが、その説明をしませんでした。

お経は漢文で書かれているので、ふつうの人が読むのはなかなか難しい。そこで親鸞聖人は、難しいお経の内容をわかりやすく伝えるために、七五調の日本語で詠んで下さりました。それがご和讃です。阿弥陀寺にお参りに行かれると壁にご和讃

が掛かっているのご存知の方もいらっしゃるでしょう。

さて、今回は『高僧和讃』といって、昔の偉いお坊さんについて詠まれたご和讃の中から、「曇鸞讃」という曇鸞和尚について詠まれたご和讃を紹介しましょう。

中国のお坊さんである曇鸞和尚は、帝から「神」という名を与えられ「曇曇」と呼ばれたこともあるほどの名僧です。親鸞聖人の「鸞」は、この「曇鸞」から取られたとも言われています。

曇鸞和尚は最初、浄土ではない他の仏教を学んでいました。ところがある日、病に倒れてしまったのです。曇鸞和尚は仙人から不老長寿の術を学ぼうと山に入り、その術の奥義が書かれる「仙經」を手に入れて下山しました。ところがその途中に高僧から「不死の教えは仏教にこそある」と『観無量寿經』を授けられ、「仙經」を焼いて、仙人の教えを捨て、浄土の教え

を研鑽されたと伝えられています。そんな曇鸞大師のことを詠ったご和讃のひとつに次のようなものがあります。罪障功德の体となる

ごおりとおおきに
みずおおし
さわりおおきに
徳おおし

このご和讃で伝えたいことは「欠点が多い人ほど徳も多い」ということです。「ああ、欠点だらけの俺はダメだ」、そう思っている人ほど実は徳が多いのです。

欠点を解かす光

ご和讃の最初の一行、「罪障功德の体となる」。能楽師である私は、これがビビビと反応してしまっています。能楽師ということで勝手な読み方を許していたら、この「体」という言葉に反応するのです。

「体（たい）」といえば「用（ゆう）」です。もともとは仏教の言葉である「体」と「用」を、能を大成した世阿弥も芸を説明するときによく使います。「体」は本体、「用（ゆう）」は現象です。夜、空を見上げると、そこには月があります。満月のときもあれば半月のときもある。三日月のときもあれば、月がないという新月のときもある。それが本当の月なのではないでしょうか。

現代人である私たちは、すべて丸い月が変化したものだと知っています。そして、その丸い月が太陽の光と地球との関係によってさまざまに形を変えることも知っています。

世阿弥は、月そのものを「体（本体）」、光を「用（現象）」だといいます。「用」である光がなければ「体」である月は見えない。それが新月で、そんな夜は「今日は月が出ていないね」と言われてしまいます。ないのと

同じなのです。どんなに美しい宝石も、暗闇に置かれていては美しさはわからない。そこに光が当たって、はじめて美しく輝きます。宝石は「体」、光が「用」です。世阿弥は、身体が「体」で、「用」は心だといいますが、心の働きによって、舞う身体は人に見えるのです。

それを前提に「罪障功德の体となる」を読むと、「罪障は功德の《体》である」と読めます。私たちの罪や障り、すなわち欠点や悪い部分が「体」であり、そこに「用」である光が当たると、それはそのまま功德になるのです。私たちの欠点は真つ暗闇の新月です。しかし、それは光を待っている。光が当たれば三日月になり、半月になり、そして満月になるのです。

親鸞聖人は、さらに罪障と功德を「ごおりとみずのごとくにて（水と水のごとくにて）」と詠われています。

罪や障りなどの欠点は

「ごおり（水）」です。凝り固まった状態です。お前はダメだ、俺はダメと思えば思うほど人は凝り固まります。冷たい視線や、冷たい言葉を浴びせられれば、水である欠点はさらに凝り固まります。でも、春になり、暖かい日差しを浴びたとき、水は解けて水になるのです。親鸞聖人は「ごおりおおきにみずおおし（水多きに水多し）、さわりおおきに徳おおし」と詠われています。

欠点が多い人ほど徳も多い、問題が多い人ほどよい面も大きいのです。あとはそれが解けるのを待つだけです。阿弥陀様の御慈悲が水を解かしてください。誰かのほのひと言が、その水を解かすきっかけになるかも知れません。あるいは時代の変化が水を解かすかも知れません。

でも、まずは自分で、

「俺のこの欠点は、裏返せば徳になるんだ」と思うところから始めるのがいいかも知れません。